

コロナ禍での心のつながりが生んだ 「さくら」を贈るプロジェクト

福岡県立戸畑^{とばた}高校

卒業式シーズンの2021年3月。旅立ちの時を迎えた学び舎の様子は、いつもの春とは明らかに違っていた。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、各校で様々な学校行事が縮小・中止となった20年度、感染防止に配慮し、多くの学校の卒業式から歌声が消えていたのだ。恩師、そして同窓の仲間たちと歌を歌うことができない生徒たちに、感謝を伝え合う機会をつくってあげたい……そんな思いから、大塚製薬株式会社と歌手の森山直太郎氏の「『さくら』を贈るプロジェクト」は始まった。それは、大切な友人や恩師との思い出の映像などとともに、感謝の気持ちを伝える動画をアップロードすることで、「さくら（二〇二〇合唱）」を歌う森山直太郎氏の映像と曲に乗せたオリジナルの「さくら」動画を各校が作成できるというもので、「歌のない卒業式」に歌を届けるプロジェクトだ。この「『さくら』を贈るプロジェクト」誕生のきっかけをつくった1人の高校教師の思い、そしてプロジェクトに参加した高校生の学びと気づきについて、紹介する。



写真1 公開中の「森山直太郎×カロリーメイト『さくら』を贈るプロジェクト」卒業ドキュメンタリー。生徒が歌う「さくら」、予餞会の様子、そして森山氏と予餞会を企画・運営する生徒とのミーティングの様子などが紹介されている。
<https://youtu.be/nOsH9F5AIHU>

一通の手紙から始まった コロナ禍でのプロジェクト

2020年11月にテレビ放映された大塚製薬カロリーメイトCM「見えないもの」篇（「さくら（二〇二〇合唱）」使用）。様々な変化を強いられたコロナ禍でも、変わらず心を通わせる生徒と教師の絆を、森山直太郎氏の歌とともに視聴者に届ける2分間のCMを見て心を動かされた、福岡県立戸畑高校教務部長の大村高敏先生は、大塚製薬に感謝の思いを綴った手紙を送った。「3月までの残り4か月、全力で駆け抜けていけそうな気がしてきました。本当にありがとうございます」。

「新型コロナウイルスの感染拡大によって翻弄された教育現場



教務部長

大村高敏

おおむら・たかとし

教職歴 21 年。同校に赴任して 4 年目。英語科。



高校 3 年生

坪井美樹

つばい・みき



高校 3 年生

山田慎之助

やまだ・しんのすけ

大人たちの本気が 生徒の心に火を灯した

において、私たちの学校も、オンライン授業の導入などによって何とか学びを止めることなく生徒と 1 日 1 日を過ごしてきました。しかし、学びをつなぐことができたとして、心をつなぐことはできていたのか、私はずっと自問してきました。そんな時にあの CM を見て、私は心から勇気づけられたのです。コロナ禍という未曾有の事態を経験する生徒たちに、企業の人たちもエールを送ってくれている。生徒を応援したいというその気持ちに、学校と企業とで違いなどないのだと感動したのです」(大村先生)

様々な学校行事が縮小・中止となり、授業以外の教室での時間が減る中、「それぞれが新しい春を迎えるまで、生徒一人ひとりの心を育て続けよう」と思いを新たにされた大村先生に、大塚製菓の担当者から連絡があったのは 1 月のこと。大村先生からの手紙の中の「卒業式の日、『ごめんね』と言って別れる教師・生徒は、1 人もいてほしくない」という言葉を受けて、「戸畑高校の生徒のために、私たちに何かできることはないでしょうか」と、大村先生に協力を申し出たのだ。大村先生が感じた通り、生徒を応援したいという気持ちに、学校と企業とで違いなどなかった。

電話のあった翌日、大塚製菓、広告代理店の株式会社博報堂、そして戸畑高校の教師たちによるオンライン会議が行われた。その場で、博報堂の社員から出てきた「生徒の皆さんと一緒に何かをしたい」という言葉を聞いた時、大村先生は、「生徒にとってかけがえのない PBL (Project Based Learning 問題解決型学習) のチャンスになる」と実感したという。

「コロナ禍の中で、新しい感動を生み出そうと挑戦する大人たちの仕事ぶりを間近に感じながら、生徒自身が大人に提案したり、フィードバックを受けて考えを練り直したりする、またとない機会になると思いました」(大村先生)

学校と企業が協働するプロジェクトには、生徒会や各クラスから、約 10 人の生徒がメンバーとして合流した。福岡・東京間でオンライン会議を重ねる中で、コロナ禍の 1 年間、様々な面で我慢を求められた 3 年生に向けて、在校生が「さくら」を合唱する動画を作成し、3 月の予餞会(在校生が卒業生を送る会)で披露するという企画が固まった。撮影・編集はすべて専門のスタッフが行い、在校生や同校教師、そして歌手の森山直太郎氏が「さくら」を歌う動画を 1 本のストーリーにまとめた。

プロジェクトの実行委員長を務めた生徒会長の坪井美樹さん(当時 2 年生)は、「我慢ばかり強いられてきた 3 年生の先輩たちに喜んでもらいたいという思いはありましたが、一方で、企業の人たちに自分の考えをちゃんと伝えられるのか、そもそも高校生の自分が、大人を前に考えをまとめられるのか不安でした」と、当時の思いを率直に語る。

「でも、最初に参加したオンライン会議で、大人たちの熱量を

感じたことで、私もメンバーの一員として頑張ろうと思いました。広告代理店の方が『実行委員長はどう思いますか?』と聞いてくれたり、私のアイデアにフィードバックしてくれたり、『こういう形ならできるかも』と発展させたりしてくださる過程で、自分がみんなに受け入れられていることを、ひしひしと感じました」(坪井さん)

実行委員の1人である山田慎之助さん(当時2年生)は、「オンライン会議で森山さんが、コロナ禍で大変な思いをしてきた高校生に思いを寄せて、涙を流してくださったことにびっくりしました」と振り返る。

「見ず知らずの僕らのために泣いてくれている……と、本当に驚きました。そして、その瞬間から、プロジェクトに対する自分の取り組み方が変わりました」(山田さん)

大人たちの思いに触れたことで、自分の取り組み方の「スイッチ」が切り替わったと坪井さんも語る。

「予餞会で披露する動画の企画について、生徒はいろいろな提案をしました。もちろん、実現できなかった案もたくさんありましたが、すぐに諦めるのではなく、なぜその案を実現したかったのかを伝え、ほかの方法で実現できないのかと、粘り強く大人の人たちと話し合うことができたと思います」

当初は、戸畑高校の生徒と森山氏それぞれが「さくら」を歌う様子を撮影し、1本の動画に編集して卒業式で上映する予定だったが、話し合う中で、森山氏から「コロナ禍でもみんなでできることはないか、もっと一緒に考えましょう」と提案があり、予餞会の2週間前に、森山氏が東京のスタジオから当日オンラインで予餞会に参加することが決まった。

「思わぬ展開に、生徒たちはますます盛り上がりました。森山さんのサプライズ感のある登場の仕方など、生徒があれこれ提案するのを聞いていた制作スタッフの方が、『生徒たちが走っているのを、大人が後ろを追いかけしているような気がしますね』とおっ



写真2 新型コロナウイルスの感染防止に配慮して、ソーシャルディスタンスを保ち、校内の様々な場所で「さくら」を歌う1・2年生たち。

しゃった瞬間は、今も心に残っています」(大村先生)

できないことが多い中で 新しいものを創り出す

1・2年生が、感染防止に配慮しながら校内の様々な場所で「さくら」を歌う様子と、東京のスタジオから森山氏が生中継でサブライズ出演した模様を含む戸畑高校の予餞会の模様は、動画投稿サイトに公開され、大きな反響を呼んだ。大塚製薬株式会社「カロリーメイト」と森山直太朗氏の『「さくら」を贈るプロジェクト』の特設サイトは、2021年3月31日までの期間において、全国の高校生が自身の思い出の動画をもとに、「さくら(二〇二〇合唱)」にのせて、オリジナルの卒業記念動画をオンライン上で作ることでできる卒業動画メーカーを提供し、多くの高校生が、恩師や仲間への感謝の気持ちを表現する場として活用した。



写真3 森山氏は、東京のスタジオからオンラインで予餞会に参加。できないことが多い中でも、人がつながることで、できることはあるということを生徒が実感した。
<https://youtu.be/nOsH9F5AIHU>

新年度を迎え、3年生になった山田さんは、プロジェクトによって学校が大きく変わったと感じている。

「昨年度は、コロナ禍が原因でできなくなったことはたくさんありました。今年度も、この先の学校生活がどうなるかは誰も分かりません。でも、今の僕たちは、体育祭も文化祭も、できることを精いっぱいやろうという気持ちでいます。戸畑高校には『一生懸命がかっこいい』というスローガンがありますが、一生懸命がかっこよく、大切であることは、コロナ禍の中でも変わらないのだと、『「さくら」を贈るプロジェクト』から学びました」(山田さん)

コロナ禍は収束していないが、学校の雰囲気は前よりもさらに明るくなったと、大村先生は笑顔を見せる。

「いろいろなことを諦めた1年でしたが、そうした中でも何か新しいことができると、生徒たちは身をもって学んだと思います。予餞会の後、生徒が私に、『先生、これからも僕らはいろいろできますよね!』と話しかけてくれました。もちろん、生徒の言う

通りです」(大村先生)

動画投稿サイトに公開された予餞会の記録の中で、坪井さんはこう語っている。

「できない中で、何かできることを探す。できないことが多いからこそ。できない中でも新しいことを生み出すことの大切さを学んだ」

1通の手紙は、生徒、教師を、学校の枠を超えて社会と豊かにつなげていった。そして、そこで生まれた心のつながりは、できない中でも新しいことを生み出す力を生徒に育んだのだ。